



昭和52年に、旧矢部町で「第3回有機農業全国大会」が開催されるなど、早くから山都町では有機農業が盛んです。この有機農業に関わる「有機の人」を紹介しています。

「村山有機農業試験場」

化学肥料や化学農薬を使わないで野菜を作ろうと、失敗をしながら様々な方法を試す村山信一さんは、妻の澄子さんから「村山有機農業試験場」の看板を掛けたら」と言われます。「最初にする者は失敗します。2番手は楽です。」

村山さんの有機農業は、その栽培技術を確立する戦いでした。

「夏にレタスを作るのに『黒マルチ』では、まともにも出来ませんでした。そこでメーカーと交渉し、『白マルチ』を作ってもらいました。『白マルチ』ができて、夏に有機のレタスが作れるようになったのです。」

「堆肥は、作付けの何ヶ月も前から入れます。土と変わらない位になじませます。」

昭和56年に、義理の弟である飯屋幹治（みきはる）さんから、有機農業に誘われます。その飯屋さんの呼びかけで、4



むらやま しんいち  
村山 信一さん  
昭和22年生まれ 小笹

人による「御岳会」が結成されます。その後、「御岳会」を中心として、昭和61年に当時の御岳農協の生産部会である「有機農業研究会」を立ち上げます。その時のキャッチフレーズは「いい水を使って、いい水を流そう」でした。「最初は部会として認められませんでした。ある方からは、『農薬を』隠れてかけているのが、分かるものか」とも言われました。」



平成30年7月 澄子さん 信一さん

誰もが有機農業の先駆者と認める村山さん。しかし、本人は特別なこととは思われません。「昭和35年頃が、農薬を使い始めた境だと思えます。有機農業はそれ以前に戻るだけです。」



レタスの生育状況を撮った写真のアルバムに、観察メモ（澄子さん撮影・記録）



「品物を作る前に、販路を作らなければなりません。」  
有機農業による生産物の出荷は、グリーンコープとの取引が始まりで、まず、ジャガイモとサトイモが求められました。  
「販路がないと話にならないので、商談会にも行きました。相手が求めているものを探ります。」  
値決めは相手との交渉となります。「（価格を）10円下げるのは易しいのですが、2円上げるのはとても難しいのです。」  
グリーンコープの消費者とは交流も行ってきました。  
「交流はやって良かったですね。小学生が来た時に、『いかだ』を作ったこともありました。」

平成30年7月 万次郎カボチャの畑



昭和63年 生協注文カタログの表紙 御岳会



平成4年 小学生との交流会

次号「有機の人」は、農協職員として有機農業の普及に取り組まれた中村一義さんを紹介します。